

## 2013年度大学入試センター試験 解説〈倫理〉

### 第1問 青年期・現代社会分野（配点 28）

問1  正解は①。

- ① ニュースでも時おり企業や公的機関による個人情報の漏えいが事件として扱われていることを、見聞きするだろう。プライバシーの保護は情報社会の大きな課題である。
- ② 「あらゆる情報」が誤り。2001年施行の情報公開法は、中央省庁に対して行政文書の原則開示を義務づけたが、個人情報や国家機密にかかわる情報など6項目は不開示とされている。
- ③ 「情報の違法な複製が困難となった」が誤り。知的所有権を侵害する、音楽ソフトや映像ソフトなどの違法コピーは現在も問題となっている。
- ④ 「マスメディアが情報操作を行う危険は少なくなっている」が誤り。

問2  正解は③。

- ③ デジタル・デバイドとは、「情報格差（情報能力の格差）」とも訳される。情報機器の所有の有無や、情報を活用する能力の有無によって、収入や社会的地位に格差が生じること。高齢者や経済的弱者に対する社会的不平等を拡大するとして問題視されている。
- ① バーチャル・リアリティとは、コンピュータ・グラフィックなどを用いて作り出された仮想空間が、現実であるかのように知覚されること。「仮想現実」とも訳される。
- ② ユビキタス（社会）とは、コンピュータ技術が生活環境に浸透しており、その恩恵を誰もが・いつでも・どこでも享受できる社会のこと。もとはラテン語で「あまねく存在すること」を意味する。
- ④ サブリミナル効果とは、認知不可能な速度や音量でメッセージを送ることで、受け手の潜在意識に働きかける効果のこと。

問3  正解は①。

- ① アメリカの心理学者エリクソンは、人生を8つの段階に区分し、それぞれの段階における発達課題を達成しながら自己を実現していくとする、ライフサイクル（人生周期）論を説いた。
- ② 「基本的信頼」が誤り。エリクソンは、青年期における課題は自我同一性（アイデンティティ）の確立であるとした。
- ③ 「一次的欲求」とは、呼吸・睡眠といった生理にかかわる欲求のこと。エリクソンには一次的欲求が成長を可能とするというような議論は見受けられない。
- ④ 子どもは自己中心的な視点を脱して（脱中心化）、物事を客観的に捉える視点を身につけていくとしたのは、スイスの児童心理学者ピアジェである。

問4  正解は②。

- ② 1991年制定の育児休業法に、介護の規定を加える形で1995年に制定された育児・介護休業法では、事業者は男女を問わず育児休業・介護休業の申し出を拒否できないとされた。しかし、休業の取得率は男女間で大きな差があるのが現状である。
- ① 「一人で住んでいる人の割合は低下」が誤り。未婚率の上昇とともに単独世帯（ひとり暮らし）も増加している。
- ③ 選択的夫婦別姓に関しては反対意見も根強く、法制化には至っていない。
- ④ 「高齢者の単独世帯数は減少」が誤り。家族や社会から切り離されたいいわゆる「おひとりさま」の増加が、高齢者の孤独死などの原因となっている。

問5  正解は④。

- ア アメリカの心理学者マズローによる、欲求の階層構造説についての正しい説明。マズローによれば、生理的欲求→安全の欲求→所属と愛情の欲求→自尊の欲求→自己実現の欲求、と高次のものになっていく。
- イ フィヒテではなくニーチェが正しい。ニーチェは、根源的な生命力に基づいて新たな価値を創造しようとする主体的な意志を、力への意志と呼んだ。
- ウ アメリカの文化人類学者ミードについての正しい説明。ミードは、南太平洋のサモア島では5歳くらいで生活に必要な知識や技術を身につけ、大人社会の仲間入りをするため、青年期特有の葛藤が見られないと指摘した。
- エ 「後天的に身についた」が誤り。スイスの精神分析学者ユングは、個人的無意識のさらに深い層に人類の経験の集積による集合的無意識がそなわっていると説いた。

問6 6 正解は②。

- ② センター倫理で定番のグラフ読み取り問題は、大問構成が変更された今年度においても変わらず出題された。先入観を排し、数値を正確に読み取って正誤を判定することが肝心だ。「行動の促し」の項目が若年層・壮高年層ともに100%であるというのは、すべての人の回答にこの要素が含まれていたことを意味する。これに加えて、「状況説明」の項目が壮高年層では50%を超える。つまり、壮高年層では半数以上が「行動の促し」と「状況説明」の複数回答をしていたことになる。よって、「若年層・壮高年層ともに半数以下であり」が誤り。
- ①③④ いずれもグラフから読み取れる内容に合致する。

問7 7 正解は②。

- ② フランクフルト学派に属する社会学者ハーバーマスは、対話的理性によって対等な立場から自由に討議し、合意を形成していくことを社会の公共性の基礎に据えた。
- ① 上述の通り、ハーバーマスは「多数者の意思（多数決）」を「公共性の原理」として採用していない。
- ③ 「納得し合う必要がなく」が、対話による合意に反する。
- ④ ハーバーマスは「親密な関係」の必要性について特に言及していない。

問8 8 正解は④。

- ④ ドイツ生まれの政治思想家アーレントのいう「活動」とは、資料文によると、「その仲間に加わりたいと願う他者の存在に刺激されたもの」であり、「語り合うことによって～人間世界に自分の姿を現す」ものである。④は、その場にはいない人を中傷する同級生に抗議することを通じて、彼らの仲間の輪に積極的に加わり、自分の考えを示している。よって「活動」の特徴を満たす。
- ① 「演者の個性」を引きたてているだけで、「自分の姿を現」しているとは言えない。
- ② 「他者の存在に刺激され」て寄付をしているものの、「自分の姿を現」しているとは言えない。
- ③ 仲のよい同級生に投票しているだけであって、「自分の姿を現」しているとは言えない。

問9  正解は⑤。

- a 空欄直後の「命題が真か偽かを確定し得る」との文言に注目すれば、「自然科学」が入ると判断できる。「形而上学」すなわち「神や道德などの問題」は、ウィトゲンシュタインは「語り得ぬもの」としている。
- b ウィトゲンシュタインが後期の思想において探究したのは、「日常生活」において人は言語をいかに習得し、使用するかということであった。
- c ウィトゲンシュタインは、日常生活において成り立つ会話を「言語ゲーム」と呼び、その規則は日常生活に内在していて、そのゲームに参加する以外に習得し得ないと指摘した。「パラダイム」は、アメリカの科学史家クーンが提唱した概念で、一つの時代に科学者たちに共有される理論的な枠組みのことをいう。

問10  正解は①。

- ① アメリカの哲学者・教育学者デューイは、プラグマティズムの立場から、人間の知性によって得られる学問や知識は、行動するときに役立つ道具であって、生活実践から離れて存在するものではないと説いた（道具主義）。
- ② 「善行を積む」が誤り。宗教改革の指導者カルヴァンは、予定説を説き、善行を救いの条件として否定した。
- ③ 柳田国男ではなく柳宗悦についての記述。
- ④ 「道具」を「手段」と言い換え、「人間を手段として扱うべきではない。個人は常に行為の目的として尊重されるべき」とすれば、パークリーではなくカントの主張を思わせる記述となる。

問11  正解は④。

- ④ リード文の対話は、インターネットには問題点が多少なりとも存在するとの観点を共有しつつ進んでいる。そのなかで、AさんとBさんが「インターネット上の見知らぬ相手とも有意義な対話を行うことができる」とする内容は、Bさんの3つ目の発言、Aさんの2つ目、3つ目の発言に合致し、また、Cさんがインターネットに対して批判的に考えていることは、3つ目の発言の内容に合致する。
- ① Cさんは、「親しい間柄でなければ、自由な意見交換を行うことができない」とは述べていない。
- ② Bさんは、「言葉を上手に使いこなす技術」ではなく、「相手に誠実に向き合う」ことを重視している。
- ③ Aさんが、「インターネット上で多くの人と対話する経験を通して、他者に配慮する態度を養うことができる、と考えている」とする内容は、会話からは読み取れない。

第 2 問 源流思想 (配点 24)

問 1 12 正解は①。

- ① ヘレニズム期のストア派が理想としたアパテイアとは、情念 (パトス) に惑わされない状態のことで、「不動心」などと訳される。これは宇宙 (自然) を支配する理法 (ロゴス) に従って生きることによって可能となり、ストア派の開祖ゼノンはこのことを「自然に従って生きよ」と表現した。
- ② 「魂の三部分間の葛藤や分裂が克服され」という箇所が誤り。これはプラトンの魂の三分説を念頭に置いた記述となっている。
- ③ 古代ギリシアにおいて「中庸」の徳を説いたのはアリストテレス。
- ④ ストア派と同じくヘレニズム期の思想家エピクロスの説いたアタラクシアについての記述。

問 2 13 正解は②。

- ② パウロによると、原罪を抱える人間は善を願っても悪に流される弱き存在にすぎず、正しい行為を**実践**することによってではなく、神の愛をひたすら**信仰**することによってのみ救済に預かれるとされる。
- ① 「身体的な苦行」が誤り。
- ③ 「誠実」を「希望」にすれば正しい記述となる。
- ④ 「教義への精通」によって救われることはない。

問 3 14 正解は④。

- ④ ゴータマ・ブッダによると、あらゆる苦悩の原因は真理を知らないこと (無明) に求められる。したがってこの真理を認識し、ブッダ (真理を悟った者) となることこそが目標とされる。
- ① 六波羅蜜は大乗仏教において菩薩が行うべき実践徳目であり、「利他」を「禅定」にすれば正しい記述となる。
- ② 仏教において人間とは五つの要素 (五蘊) がたまたま寄せ集まったものにすぎず、自我を含めたあらゆる実体は否定される (諸法無我)。したがって悟りに至るためには自己にこだわること (我執) を克服することが求められる。
- ③ 解脱への道のりについての説明が誤っている。ブッダはバラモン教やジャイナ教のように苦行による悟りを否定し、苦行と安逸 (快樂) の**中道**に正しい道があるとする。

問 4 15 正解は①。

孔子は仁の核心を他者への思いやりの心（恕）として説明している。「義」とは人が従うべき客観的規範であり、心の内面における仁や恕とは性格が異なる。

また孔子の議論をより具体的に展開した孟子は、万人は徳の端緒としての四端の心をもつとして、他者の不幸を見過ごせない惻隱の心（仁の端緒）をはじめとする四つを挙げている。「辞讓の心」は他者に譲り他者を尊重する心であり、礼の端緒であるとされる。

問 5 16 正解は③。

③ 教父哲学の 아우グスティヌス はパウロの贖罪論をより一般化し、原罪を抱える人間には自力で善をなすことが一切できないとされ、善はすべて神の恩寵（恩恵）であるとする恩寵説を説いた。

- ① 原罪は「一部の悪しき人々」だけがもつものではない。
- ② 아우グスティヌスは母の罪が神に裁かれることを嘆いているわけではなく、まして神が「報復主義」に立つなどと考えているわけではない。
- ④ 母の個人的な罪を嘆いているわけではない。

問 6 17 正解は④。

ア 五行の一つ断食（サウム）に関する正しい記述。病人や妊婦はその限りでないが、原則として人々は断食月（ラマダーン）の期間中の夜明けから日没まで一切の飲食を断つ必要がある。

イ 確かに巡礼（ハッジ）は五行の一つだが、巡礼先はムハンマドの生誕地メッカである。

ウ ムスリムは毎日 5 回メッカに向かって礼拝（サラート）をしなくてはならないが、イスラーム教では偶像崇拝が厳禁されているので、「アッラーの肖像画」はありえない。

問 7 18 正解は②。

兼愛説が家族愛といった自然な人倫を損なうものであると批判したのは、老子ではなく儒家の孟子である。その他の選択肢の記述は正しい。

問 8 19 正解は③。

- a プラトンにおいて美そのもの（美のイデア）は個々の美しいものに先立って存在し、それらを美たらしめる根拠である。したがって、これは「創造」されるものではなく、ただ知性によって「観想」されるべきものである。
- b アリストテレスにおける友愛（フィリア）は、キリスト教や仏教におけるような万人に対する普遍的な愛ではなく、自分にとってかけがえのない友との間に成立し、相手の善を願う心を意味する。従って、空欄 b には「親しい人」が入る。
- c 新約聖書における愛（アガペー）とはまずもって絶対的な存在である神による人間への無償の愛を意味し、これを受けて地上の人々には「神への愛」と「隣人愛」が求められる。空欄 c には「他者」が入る。

問 9 20 正解は②。

- ② 魂の動揺を抑えることが重要であるとしても、よりよい社会をつくるためには他者の悲しみに共感できることも大切だ、というのがリード文の趣旨である。
- ① 第 2 段落のストア派やブッダのように、みずからの努力で情念を抑制することは不可能であるとはされていない。
- ③④ 第 4 段落では、人々を善行へと動機づけるためには「義務」だけでないこと、他者への「共感」がよりよき社会の実現に資するものであることが述べられている。

### 第 3 問 日本思想（配点 24）

問 1 21 正解は④。

- ④ 古来日本では、天地万物の現象や人間の世界の出来事は「おのづから」なるものと考えられてきた。また、『古事記』には多数の神々が描かれている。
- ① 「唯一絶対なる神」が「世界に存在するすべてのもののあり方を定めている」というのは、ユダヤ教・キリスト教・イスラーム教における神のあり方。
- ② 「多数の神々が存在」は正しいが、「その背後に唯一絶対の神が控えている」が誤り。
- ③ 「高天原」は『古事記』に描かれた神々の世界として正しいが、「そこに暮らしている神々が世界に存在するすべてのもののあり方を定めている」が誤り。



問2 22 正解は①。

- ① 「因果応報を教える説話として**適当でないもの**」という設問の要求を踏まえて正誤を判断する。**因果応報**とは、原因となる人間の行為（カルマ）によって運命や来世での境遇が決まるとする仏教の考え方。ある女が二つの石を産んだこと、（神の）お告げがあってその石を祀り崇めたこと、そのどこからも因果応報は読み取れない。
- ② 女は、蟹を逃がしてやった（因）ことで、大蛇に襲われたときに助けられた（果）。
- ③ 僧は、布施を自分のものとして贅沢をしていた（因）ことで、熱病で死んだ（果）。
- ④ 僧は、鳥を殺した（因）ことで、その生まれ変わりである猪のせいで死んだ（果）。

問3 23 正解は②。

- ② **末法**とは、行（仏の教えによる修行）と証（修行の結果としての悟り）が失われ、教（仏の教え）だけが残された時代のこと。正法（教・行・証がすべてそなわった時代）・像法（証が失われた時代）を経て、1万年続くとされる。日本では、1052年に末法の世に突入したと考えられた。
- ① 末法では行が失われているので、「修行者」はいない。
- ③ 末法でも「仏の教え」は消滅していない。
- ④ 末法では「修行者」はいないが「仏の教え」は説かれる。

問4 24 正解は③。

- ③ 徳川将軍家に仕えた朱子学者の**林羅山**は、常に心に敬み（つつしみ）をもち、上下定分の理を体現すべきことを説いて、これを「**存心持敬**」と表現した。
- ① 「**真実無偽**」は、嘘いつわりのない正直な心のこと。伊藤仁斎は仁愛を成立させる条件は「誠」であるとし、「誠」とは**真実無偽**であるとした。
- ② 「**万人直耕**」は、安藤昌益が『自然真営道』で説いた、すべての人が農業に従事して自給自足の生活を営む人間生活の基本的なあり方のこと。
- ④ 「**知行合一**」は、知ることと行うことは本来一つのものであるとする考え方。陽明学で説かれ、江戸時代には中江藤樹によって広められた。



問5 25 正解は②。

- ア 「動植物への関心」「博物学的な知のあり方」などの文言から、**貝原益軒**についての記述と判断できる。益軒は、『大和本草』を著すなど、近世日本における**本草学**（中国伝来の、動植物や鉱物の薬物としての効用を探究する学問）の基礎を築いた。
- イ 「懐徳堂」「無鬼論」などの語から、**山片蟠桃**についての記述と判定できる。大坂町人の出資により開かれた私塾・懐徳堂に学んだ蟠桃は、『夢の代』を著して、合理主義の立場から地動説を主張するとともに、靈魂は存在しないとする**無鬼論**を展開した。
- ウ 「懐疑的態度」「条理学」などの語から、**三浦梅園**と判断できる。長崎でヨーロッパの自然科学（蘭学）を学んだ梅園は、儒学と蘭学を融合させ、自然には条理（法則）がそなわっていると**条理学**を説いた。

問6 26 正解は①。

- ① **西周**の朱子学が説く「理」に対する批判の要点は、「理は二通りあって、その理が互いに少しも関渉しない」との文言にある。すなわち、天地自然を貫く「物理」と、人間上ばかりに行われる「心理」とは、「まったく別なもの」であるにもかかわらず、朱子学者は両者を「一様に」説くというのである。選択肢文の「両者は異なる原理に立つものであるにもかかわらず、朱子学はそれを混同している」との記述は、資料文のこの趣旨に合致する。
- ② 「人間だけが知ることのできる心理」「心理は物理の支配下にある」が誤り。
- ③ 前半の記述は①と同一で正しいが、後半の「両者は連続したものである」が誤り。
- ④ 「人間だけが知ることのできる心理」「物理は心理の支配下にある」が誤り。

問7 27 正解は①。

- ① 『**文学界**』を創刊するなど**ロマン主義文学**の中心的人物であった**北村透谷**は、自由民権運動の挫折を経験して文学を志し、実世界における幸福を求める**功利主義**を退け、**想世界**において内面的な自我の確立を図るべきことを説いた。
- ② 「実世界における実践で確立される」が誤り。
- ③ 前半の記述は①と同一で正しいが、後半の「本能を重視」が誤り。
- ④ 「想世界と実世界は一致し」が誤り。

問8 28 正解は②。

- a 西田幾多郎は、主観と客観の分離を前提とする西洋哲学に疑問を呈し、主客未分の状態における純粹経験（海に沈む夕日の美しさに我を忘れてうっとりするような）こそが人間の根本的な経験であるとした。
- b 西田は、主客の対立の根底にあるものを探究し、両者を成立させる場所の論理を展開した。
- c 西田は、相対的な有・無の対立を超えてすべてのものを存在させる原理として絶対無を見出した。

問9 29 正解は③。

- ③ 「世界のあり方を問い直し、思考を深める過程で見いだされる」との記述は、第2～第4段落で展開された、古代・近世・近代における具体的な考察に合致する。また、「新たな思考のかたちを生み出す契機」「事態の核心に迫ることを可能にする」も、「世界と自己のあり方を問い直すものであった」西田哲学のあり方に合致する。
- ① 「『理』を求める知的態度には限界がある」「物事に対して懐疑的立場を保持することが必要」とする内容は、リード文からは読み取れない。
- ② 日本文化が「外来の文化を進んで取り入れることで成立」したとはよく指摘されるところであるが、リード文の内容とは関係ない。
- ④ 「世界の移ろいと『理』とを一体的に理解することが重要」「大切なのは～自然に従い生きていく態度」などとする内容は、リード文からは読み取れない。

#### 第4問 西洋近代思想（配点 24）

問1 30 正解は②。

- ② 宗教改革の指導者ルターの代表的著作が『キリスト者の自由』。ここではキリスト者が信仰において自由であるがゆえに、地上ではあらゆる者への奉仕者となるべきことが説かれている。
- ① 『愚神礼讃（痴愚神礼讃）』は自由意志をめぐるルターと論争をしたエラスムスの著作である。
- ③ 『キリスト教綱要』はジュネーヴで宗教改革を展開したカルヴァンの著作である。
- ④ 『人間の尊厳について』は人間性の解放というルネサンス期のムードを体現するピコ・デラ・ミランドラの演説原稿である。

問 2 31 正解は⑥。

ア 「人間相互の交わりや社会生活から生じる」とあるので、「種族のイドラ」ではなく「市場のイドラ」。

イ 正しい。

ウ 「人間に共通する自然的な制約から生じる」とあるので、「洞窟のイドラ」ではなく「種族のイドラ」。

エ 「各人が各様にもっている経験や知識から生じる」とあるので、「市場のイドラ」ではなく「洞窟のイドラ」。

問 3 32 正解は③。

③ 18 世紀フランスにおける啓蒙思想の代表者がヴォルテール。ロックの社会思想やニュートンの自然科学などをフランスに紹介することで、社会と科学の刷新を目指した。

① デイドロではなくモンテスキューについての記述。

② モンテスキューではなくデイドロについての記述。「様々な学問や技術を集大成した著作」とは『百科全書』のこと。デイドロは百科全書派のリーダーだった。

④ パスカルではなくルソーについての記述。

問 4 33 正解は④。

④ 合理論者は経験によらない合理的な推論によってのみ真理が得られるとし、経験論者はあらゆる知の源泉を経験に求めたのに対し、批判哲学を確立したカントは、認識は素材を受け取ることにより始まり、それを能動的に秩序づけることによって完成されるとして、合理論と経験論を統合した。

① カントは人間の認識能力では物自体は認識できないとした。

② カントは確かにヒュームの強い影響を受け、因果性の概念が客観的に存在するものではないとしたが、人間が思考する際に必ず用いざるをえないカテゴリーであるとして、単なる主観的信念にすぎないという見解はとらなかった。

③ 霊魂や神などについては感性的な経験の及ばない世界であることから、カントはそれらについて思考することはできるが認識することはできないとした。とはいえ理性的な認識が不可能であるということは、その存在が否定されることを意味するわけではない。このような立場は不可知論と呼ばれる。

問5 34 正解は②。

- ② 功利主義の哲学者ミルにとって、個人の自由は「最大多数の最大幸福」つまり社会全体にとっての幸福を実現するために欠かせないものであった。したがって、自由は最大限に保障されるべきであるとして、他者に危害を加えない限り一切の自由が認められるという**危害原理**を定式化した。
- ① 「無意識の欲望が抑圧」というのは精神分析学の祖フロイトの議論である。
- ③ 個人の自由が他者に危害を与えるケースにおいては、その自由は制約を受ける。また功利主義は自然権の観念を厳しく批判している。
- ④ ミルが自由を擁護したのは神学的見地によるものではない。

問6 35 正解は①。

- ① 人間が「他人と関わらず独立して生きる存在である」という記述が誤り。マルクスは、人間が労働によって自己実現を果たし、また社会的に相互依存しつつ生きる存在であると考えている。
- ②③ 「労働の疎外」についての正しい記述。
- ④ 商品の「物象化」についての正しい記述。

問7 36 正解は⑥。

- a ハイデッガーによると、本来の人間は、存在の意味を探求する**現存在**である。しかし多くの人は、こうした本来の営みに向かわず、気晴らしに向かい、その他大勢の人々に同調するだけの「**ダス・マン**（世人、ひと）」へと頹落してしまっている。なお「ルサンチマン」は「怨恨」を意味するニーチェの用語。
- b これを克服するためには、漠然たる「**不安**」から逃げるのではなく、みずから**死への存在**であることを深く自覚することが必要だとされる。なお「**絶望**」はキルケゴールの用語。絶望は明瞭な対象について起こる現象だが、不安は対象がはっきりしない。
- c 後期のハイデッガーは科学技術の問題を重視し、『「**ヒューマニズム**」について』のなかで、人間が存在そのものを探求することのなくなっている現状を「**故郷の喪失**」と呼んでいる。なお「**人倫の喪失**」とはヘーゲルが言う人倫の第二段階「**市民社会**」を表すものである。

問8 37 正解は④。

ア 現代フランスの思想家ボードリヤールは、現代社会を「消費社会」と呼び、消費が必要によるのではなく、ブランド品に示されるように他者との差異を示すための記号的な意味をもつと論じた。

イ 近代的理性が道具的理性にすぎなかったとして、それが生活を改善するのみならず、あらゆるものを支配するという暴力的な性格をもつことを暴いたのは、フランクフルト学派のホルクハイマーたちである。

ウ 近代の本質を合理性に見出し、近代社会が管理社会となっていくことを宿命的なものと捉えたのは、『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を著した社会学者ウェーバーである。

問9 39 正解は①。

- ① 批判とは単なる非難ではなく、社会や自己についての異なる可能性を構想するためのものである、というのがリード文の趣旨である。
- ② 伝統的な「権威や価値」を自明視せず、「現実をありのままに受け入れる」のではなく、あらゆるものごとを深く吟味することが求められている。
- ③ 「批判の活動それ自体を否定する」べきことまでは論じられていない。
- ④ リード文では「自己について問い直す」（最終段落）べきことを強調しているが、「自分」が「時代に流されない主体的な生き方を送る」ことを批判の意味としてはいない。